

ラオス医療援助活動に同行して

1年次 嘉数尚子

今回、ラオス医療援助活動に同行させていただくという大変貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。今回は、ラオスの首都ビエンチャンだけでの同行となりましたが、いろいろなことを学ぶことができました。特に、ラオスの医学生との交流や、琉球大学が建てた小学校で学ぶ子供たちとの交流、そして、セタティラート病院での手術や診察のことが心に残っています。



ラオスの医学生たちとの交流では、あまり英語が得意でなかったため、コミュニケーションをとるのに苦労しました。でも、一緒に昼食を食べたことや、パーティーでの儀式やダンスで仲良くなれたと思います。交流する中で、ラオスの医学生には地域に貢献して立派な医療人になる！というような意識がとても高いように感じました。

小学校での子供たちからも、授業の時間には活発に発言したり、一生懸命先生の話聞いていたり、勉強することへの意欲の大きさを感じることができました。ラオスの子供たちが、サバイディー！と大きな声で挨拶を返してくれるのがとても嬉しかったです。



そして、セタティラート病院での見学では、診察の光景が印象に残りました。砂川先生が前回手術を受けた男の子の診察をしているところを見学することができたのですが、男の子が砂川先生や他のスタッフの皆さんに感謝しているという様子がとても感じられました。高度医療が発達している日本では、このような光景はみられないかもしれないと思いました。また、術後の女の子に付き添う親の、わが子を見守る目も忘れられません。

将来、離島や僻地で働く私たち地域卒の学生には、離島や僻地のよう、整った設備がない中で、このような活動をしているのを見学できたことは、大きな意味があったと感じます。今回は、ビエンチャンのみでの同行で、さらに僻地の村などでの手術や診察の見学をすることはできなかったため、4年生以降に、また機会があれば、このラオス医療援助活動に参加したいと考えています。

大変貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました。